

## シンガポールでの研修を振り返って

福島県立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 後期研修医 鈴木 亮

前年度のプログラムに参加した大槻先生の影響もあり、福島医大耳鼻咽喉科・頭頸部外科からは、西條先生、仲江川先生と私の3人がシンガポール研修に参加申し込み、なんと3人とも研修に参加できるとわかったのが12月の末だった。それから数回、シンガポール研修プログラムに参加する全員で、コラッセ福島でミーティングを行った。初期研修医の先生方が半数、後期研修医の先生方が半数おり、Singapore General Hospital (SGH) では、どこの科をまわり、何をするかなどが、何度も話しあわれた。結局は前回と同様に、英語でのプレゼンテーションをすることになり、耳鼻科の3人で魚骨異物の症例を発表することになった。ノレット先生、石川先生、フラッシュャー先生に修正をいただき、また医局の先生方の前で数回プレゼンをし、様々なアドバイスをいただきながら、スライドを完成させた。

不安と期待を抱きながら、シンガポールに向けて出発した。夜シンガポールに到着し、Furama City Centre でみんな揃ってからミーティングを行い、その後ホテル近くのクラークキーにいった。2日目、ホテルから徒歩でSGHに向かった。午前中は病院内の様々な施設を見学した。その中でも耳鼻科など specialist が外来患者を診察する specialist outpatient clinics を訪れた。その中でも印象的であったのが speech Therapy Services であった。Speech Therapist (ST) が17人働いていた。音声訓練というよりは嚥下訓練を中心に行っており、耳鼻咽喉科医の下で、2年間喉頭ファイバーの訓練を行えば、ST1人で、嚥下内視鏡検査などを行うことができ、嚥下の治療の効率をあげていることには驚いた。



午後は、SGH のレジデントや関係者の前で、日本で準備してきた魚骨異物の症例を英語でのプレゼンテーションした。英語での発表は練習していたので、なんとかできたが、その後の質問への対応などに苦労しながらも、なんとか無事終了した。その後、翌日以降のスケジュールについて担当科の先生と意見交換の場がもたれたが、耳鼻咽喉科の先生方は忙しく、どうしてもその会に参加することができないとのことであった。その場にいた Plastic surgery の先生方が私たちに話しかけてきていただき、1 時間くらい日本とシンガポールの研修制度、医療制度などについて意見を交換した。シンガポールの医者は General Practitioner (G.P) と Specialist に大別される。G.P とは、一般総合医のことで、全般の日常的な疾患の治療を行う。一方、Specialist は、一般医療知識の習得後、耳鼻咽喉科など、専門の資格を得た専門医のことである。シンガポールでは、疾病の際には、まず、かかりつけの医者（いない場合には適当な一般総合医）を受診し、治療を受ける。もし、患者が一般総合医の治療範囲を越え、より専門的な知識や治療が必要な場合には、その一般総合医に、その人に適当な専門医を紹介してもらえるシステムになっているようだ。そんな話をしながら、時間は過ぎ、耳鼻科の先生から翌日の集合時間を伝えられ、その日は終了した。



3 日目、4 日目は 7 時 30 分に集合し、耳鼻咽喉科、頭頸部外科病棟での回診に参加することから 1 日が始まった。気道狭窄、急性乳様突起炎、壊死性リンパ節炎、甲状腺全摘出術後、など 20 人くらいの患者を 8 人の Dr がグループをつくり回診した。その後 SGH 内にある café に行って、朝食やコーヒーなどを飲みながらその日のお互いの予定を確認し、午前には Dr. Gan Eng Cern の外来診察につかせてもらった。午前の診察で 1 人の医師あたり 30-40 人を診察するようだ。外来患者をすべて診察終了するのに 14 時くらいまでかかることも多く、昼食を

食べずに午後の業務にうつることもしばしばだそうだ。慢性中耳炎、難聴、アレルギー性鼻炎、腫瘍、めまいなど、その日も30人弱の患者を診察した。Dr. Gan Eng Cern と昼食を食べながら、シンガポールの医学教育、医療体制など日本との違いについて、意見交換した。午後は内視鏡下甲状腺手術の予定であったが、シンガポール政府に必要書類を提出していなければ、外国人は手術室に入室し、手術を見ることができないと法律で決まっているとのことで、見学できず、3日目は終了した。4日目 Dr. Gan Eng Cern が午前から手術予定であるために、Voice clinics を見学予定であったが、いろいろな事情で予定が変更され、Sleep clinics と一般外来を見学した。睡眠時無呼吸症候群は耳鼻科単独で見ることにはまずなく、神経内科、呼吸器科の先生と協力しながら治療を行うとのことであった。また、Sleep clinics では睡眠時無呼吸症候群になりやすい顔つきなど夜にはシンガポールで有名なカニ料理を食べながら、SGHの先生方と様々なことを話し合い、楽しい時間をすごした。

翌日はSGH Museum 見学した。SGHの歴史を学んだあとに、お世話になった先生方の前で3分くらい英語で感想を述べた。その後担当の先生たちと1時間くらい今回のSGHの研修などについて話し合い、SGHでの研修は終了した。



最終日には石川先生、大谷先生の後輩である亀井先生が勤務している Japan Green Clinic に行き、昼休みの1時間だけと忙しい中、お話を伺うことができた外来患者は午前平均120人くらいで、99%日本人であり、クリニックで働くスタッフは全員日本語を話すことができるという。印象的であったのは、シンガポールにおける福祉施策の財政面での中心的役割を果たしている CPF (Central Provident Fund、中央積立基金) についての話であった。

翌日朝の便でシンガポールを出発し、午後成田に着いた。

シンガポールでの研修を振り返って思うことは、医療体制が日本と違うことなどたくさんあったが、日本に帰ってきても、自分が変わる気にさえなれば、

変わるものとして、英語の重要性につきる。日本人はまず日本語を話すことができる、まず生活するに困ることはない。しかし、シンガポールでは中国人、インド人、マレーシア人など様々な国の人々が住み、患者としても様々な言語を話す人たちが来るので、医師も診察するためには自由に言語を扱わなければならない。SGH でつかせていただいた Dr. Gan Eng Cern は 4 カ国語を話せるそうだ。今の時代パソコンが使えるから、英語が話せるから advantage がある時代ではなく、パソコンが使えて、英語が話せて standard な時代だと思う。シンガポールに今回来ることができたことで、強く心に残ったことである。

最後にこの研修で出会ったすべての方々に改めて感謝申し上げます。